

精神障害者の就労と地域生活が回復に及ぼす要因 ～有限会社を運営する当事者に焦点をあてて～

西田美香

Factors Affecting the Ability of Persons with Mental Illness to Return to Work and
Community Activities
—A Focus on Company Employees—

Mika NISHIDA

Abstract

The current trend in the mental health care systems in Japan is to enable patients to live in the community. This research interview study included 11 employees at Company A who were diagnosed with a mental illness and examined the factors affecting their ability to return to work and community activities. Data in 4 categories were analyzed: <1> challenges of community life (ability to cope with difficulties), <2> independence in daily activities, <3> new discovery of self (loss of a special existence), and <4> living with prejudice and obstacles. Learning to overcome the challenges faced in society (ordinary difficulties) and encountering a variety of people helped to foster independent living skills. Patients also regained confidence in themselves and others and spoke of a promising future. A system focusing on a "return to independence" is essential to help mentally ill persons reintegrate into the community. Therefore, this issue must be addressed in the future.

Key words : Person with Mental illness , Job , Community Activities , Recovery, Qualitative research

キーワード：精神障害者 就労 地域生活 回復 質的研究
2008.11.26 受理

はじめに

障害者の自立と社会参加が叫ばれるなか2004年9月、国民意識の変革や精神保健医療福祉体系の再編と基盤強化を図り、入院医療中心から地域生活中心へ改革を進めるため「精神保健医療福祉の改革ビジョン」が打ち出された。また、2005年に障害者自立支援法が制定され、障害者の就労や地域生活をより具体的に実現するシステム構築が注目されている。精神障害者においては、障害者の雇用の促進等に関する法律の改正（2005年6月）により、翌年4月から雇用率制度が適応され、さらに精神障害者雇用対策として、ジョブコーチ支援やトライアル雇

用、障害者就業・生活支援センター事業など精神障害者の雇用機会の拡大のため様々な対策が取り組まれている。

戦後における我が国の精神障害者への主な対策は、医療施設への隔離収容であり、そのため精神障害者は社会参加の機会を失い、地域で生活する力を奪われてきた。本研究で調査した有限会社の関連施設である精神科病院理事長は、その精神障害者の回復について医療の限界を感じ、「地域で発病したのなら地域で回復していくのが自然ではないか」と語り¹⁾、精神障害者の回復において地域生活支援が重要な鍵を握っていることを示した。また、精神障害者の回復において地域生活の実現とともに就労も大きく影響してくる。精神障害者が仕事をするこの

意義について早野(2005:41)は、経済的な生活を維持していく上で必要であることに加え、社会的に一個の人間として認知され自尊感情の満足につながったり、自己実現や自己表現につながることを、そして、社会的関係を広げ、「生きがい」を持てることを挙げている。そこで本研究では、精神障害者が自主運営する有限会社「A」の活動と、そこで働く当事者(以下メンバー)の変化、成長について調査し、地域における就労や地域生活が精神障害者の回復に及ぼす要因について検討した。有限会社「A」は人とつながることを目的に、地域住民とともに会社設立に向けて活動した。また会社設立後はメンバーが中心となり会社運営を行っている。そしてメンバーは地域に住み地域で働くことにより、「自分らしく生きる」という回復の道をたどっている。そこで、会社設立にあたりともに活動してきた当事者、援助者、地域住民、家族にインタビュー調査を行った。特に本研究は、当事者へのインタビュー調査に焦点をおき、就労と地域生活が「精神障害者の回復」に対してどのように影響したのか、その要因を探るためグラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下GTA)を参考に分析を行った。木下(2007:25-30)はGTAの特性としてグラウンデッド・セオリーが社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れていることや、ヒューマン・サービス領域での実践的な活用に耐えうることを挙げている。本研究は「A」で働くメンバーと環境との社会的相互作用とそのプロセスに注目し、地域における就労と地域生活が精神障害者の回復に及ぼす要因についての検討を目的としているためGTAを参考とした。

研究方法

調査対象者と方法

調査は2007年7月22日から9月17日にかけて実施し、面接対象者に対して半構造化インタビューを行った。面接対象者は「A」関係者35名(メンバー11名、地域住民関係者14名、行政関係者2名、スタッフ6名、家族2名)で、本研究ではメンバー11名のデータ分析を行った。当事者に対して、「A」に出会うまでの生活史や活動による変化、そしてこれからの希望を中心にインタビューを行った。なかでも活動の中心的人物である2名のメンバーについては、「A」と授産施設との活動内容の違いや、「A」の活動が自身の生活に与える影響、また、障害やこれまでの人生について自らの言葉で語り他者に伝えることの影響について、より丁寧に確認するために、2~3回のインタビューを行った。インタビュ

ー時はフィールドノートを取り、その後の分析過程において参考とした。インタビューの内容はICレコーダーに録音し逐語録を作成した。その逐語録において、地域生活で遭遇する困難の捉え方と対処法、疾病や障害の理解とその付き合い方、つながりの構築で得られる喜びや心境の変化、新たな発見や未来への希望などに注目し、概念生成については、修正版GTAで開発されたワークシートを使用した³⁾。ワークシートにデータから抜き出した注目箇所を記入しさらに読み込むなかで、そこから捉えた本質やひらめき、発見を理論的メモとして記録した。理論的メモは、生成した概念の説明である「定義」の作成において参考とした。分析の結果、15の概念が生成された。そして、その概念の関連を探るためストーリーラインを作成し、15の概念を4つのカテゴリーに集約した。

面接対象者の選考方法は、「A」のメンバー6名と援助者4名によるミーティング(2007年6月25日実施)において、筆者より本研究の概要、調査内容や調査時期、方法等を説明の上、「A」設立に関係の深い人物を選考してもらった。選考された人物に対して、筆者より本研究の概要、調査内容や調査時期、方法、情報の取り扱い等について文書に基づいて説明を行い、同意と調査の協力を得た。

結果

1. 有限会社「A」の概要

(1) 会社設立までの動き

精神障害者が地域に溶け込み、地域のなかで働く場を作ろうと、精神科病院で働く精神保健福祉士(以下PSW)が中心となり会社設立に向けた活動を始めた。PSWは、活動のヒントを得るために全国各地で実践されている支援活動を視察し、自分達の地域では何ができるのかを考えた。その構想を街づくりコーディネーターにコンサルトし、会社設立に向けて動き始めたのである。働きたい、活動に興味があるという当事者を募り当事者の会を結成すると同時に、地域の有志(一般住民や商工業者)の会を結成し、活動の趣旨を説明、会社設立に向けて協力を得た。そして、会社のコンセプトを話し合い、活動の全容を作り上げていった。そこで誕生したのが、人と人がつながることを目的とした有限会社「A」である。「A」の活動内容を表1に示す。

2. 分析結果と視点

インタビュー内容から抽出した4つのカテゴリーを①

地域生活への挑戦(困難を乗り越えることで獲得する力)
 ②主体的活動から生じるもの③新たな自己の発見(特別な存在からの脱却)④偏見や障壁とともに生きるとした。
 このカテゴリーに集約された15の概念【環境づくり(人とつながる環境、専門家の力を借りる)、症状をコントロールする力、自分を認める仲間との出会い、社会的役割を担う、家族を築くことによる責任と希望の醸成、地域住民との自然な関わり、将来を見据える力、自信と責任感の構築、支え合う喜びの実感(人の幸せを願う気持ち)、他者から受容されることによる安心感、自分を語ることが癒し、回復の可能性を信じる、未来の自分を想像する、自分の中にある偏見への気づき、他者から理解されることへの希望】について以下に説明する。

(1) 地域生活への挑戦(困難を乗り越えることで獲得する力)

1) 環境づくり(人とつながる環境、専門家の力を借りる)

地域で生活し「A」で活動することにより、メンバーは様々な形態で人とのつながりを構築している。それは仲間、地域住民、夫婦、家族、医療従事者、同じ労働者としての地域とのつながりである。医療施設や福祉施設へ入所している場合は、その関係性は医療従事者、患者、それぞれの家族という限られた関係性となるが、地域で生活し働く場合、その関係性は広がりを見せる。「A」

で働くメンバーは、日々の生活のなかで困難にぶつかった時、仲間や医療従事者と語り合い、また、地域生活や商売について地域住民や商工業者から知恵を借りることで、その困難を乗り越えていた。「A」設立に協力した地域の有志は、その後「A」の応援団となり活動への支援を行っている。そして、その有志とのつながりがあるからこそ、地域で行われる行事に参加しやすい環境になったとメンバーは語った。その他にも会社設立にあたり出資してくれた出資者には、店の経営状況を定期的に報告し、築かれたつながりを大切に育てていた。

精神障害者は疾病と障害を併せ持つ特徴があり、生活のなかでそれらといかにか付き合っていくかという問題も存在する。あるメンバーは地域生活を送る上で、いつでも気軽に相談できるコンビニエンスストアのような相談施設が必要であると語った。病院を受診したら即入院になるのではないかという不安から、病院受診を躊躇しているメンバーもいた。また、地域における差別や偏見のなか、住民と共生していくための支援がほしいという声も聞かれた。ここで注目されることは、自分たちが地域のなかでどのような困難を抱え、その困難を乗り越えるためにどのような支援が必要なのか当事者の声で表現するということである。地域生活を送る当事者が声をあげることで、ニーズに沿った支援をより具体的に考えることができるのである。

表1. 有限会社「A」の活動内容

事業理念	1. コミュニケーションを大切に 2. 困っているところを仕事に 3. 地域とできるだけ競合しない 4. できないことで人を結び安心を絆に 5. 関係づくりは思いやりと優しさから(弱い人を大切に)			
	有限会社「A」事業内容			
	店遊び「A」	ワーク	ネットワーク	共同住居
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・手作り作品の受託販売 ・喫茶店 ・ギャラリー ・趣味の教室 ・フリーマーケット ・作業所の作品販売 	<ul style="list-style-type: none"> ・清掃作業 ・ゴミ捨て ・洗車 ・地域便利屋 ・町内資源ゴミ分別収集作業(平成18年度まで) ・コラボレーションビジネス 	<ul style="list-style-type: none"> ・全国作業所との連携 ・地場産業・商品の宣伝販売 ・まちづくりへの参加 ・イベント、講演会の企画 ・地域通貨「心のお金・花子」 	<ul style="list-style-type: none"> ・共同住居の運営
目標	<ul style="list-style-type: none"> ・利益を優先しない ・作品出品者、見に来てくれる人、買ってくれる人相互の交流とコミュニケーションの場所とする ・顔の見える関係(安心)をつくっていく ・オープンなスペースとサロンの提供 	<ul style="list-style-type: none"> ・利益を上げていく ・町の人の困っているところを仕事としていく ・仕事を通しお客さんと付き合っていく ・地域とのつながりをつくっていく 	<ul style="list-style-type: none"> ・地場商品の紹介、販売をネットワークを利用し行うそのことで地域の産業に貢献し、互いが発展していく ・地域に対し情報を発信していく ・支えあえる人、まちづくりをすすめていく 	<ul style="list-style-type: none"> ・病を持つ仲間の地域の暮らしに学びながら、保護ではなく自立に向かう応援をする

2) 症状をコントロールする力

「A」で働くメンバーは、服薬や症状について、また、日常における些細な悩みについて、仲間や医療スタッフに気軽に相談していた。メンバーのなかには、それまで自分の病名や何の薬が処方されているかも知らない者もいた。しかしそのメンバーは「みんなと話しているうちに、ああ、病気ってこうなんだ。自分の病気ってというのがこうすれば(病気に)なるんだな、こうすれば治るんだなってことで。だんだん回復っていうか、治ってきて再入院しなくなりましたね。薬のこともだんだんわかってきたしね」と語った。このように、実際に同じ障害を抱える仲間との活動や語り合いから、自分の障害の理解を深めていた。さらにメンバーは自分の症状を理解し、コントロールする力を身につけていた。例えば、「早口でしゃべるようになったら危険信号。その時は休みを取るようになる」や「(色々なことを) 背負いすぎると言われる。最近は疲れたら裏で寝たりとかもできるようになった」など、体調が悪化しそうなサインを自分なりに理解し、その対処法をそれぞれのメンバーが考えていた。またなかには、疲れた時は仕事の調整をして一カ月ぐらい仕事を休み気分転換を図るといったメンバーもいた。その他に、頓服の使用や仲間や家族、職員に気持ちを語ることで症状のコントロールを図り、仕事をしながらの地域生活を継続させていた。向谷地(2005:254-261)は、「自分を助ける主役は専門家や仲間ではなく、あくまでもまず『自分自身』である」とし、自分の助け方、守り方を学ぶためにSSTの活用や当事者研究を行っている。「A」のメンバーは、自分の助け方、守り方を日々の活動のなかで自然と身につけていた。

3) 自分を認める仲間との出会い

「A」の活動で、「みんなと仲良くできたこと、何でも話せることがうれしい」とメンバーは語る。また、「みんな条件は一緒。みんな精一杯やってくれているんで、私も負けなようにがんばらなきゃと思う」と語り、仲間とつながることの喜びを感じるとともに、疾病や障害を抱えながら働くことの困難は自分だけでなく、みんなが同じように抱えているのだとお互いを理解し合っていた。

「A」で働くメンバーには自分の疾病について臆することなく語るメンバーと、まだ語ることに踏み切れないメンバーがいる。また、地域の人々に精神障害者であると知られることに抵抗感を感じているメンバーと、その抵抗感を乗り越えたメンバーがともに活動している。ここで注目されるのは、それぞれの考え方、思いをメンバ

ーが理解し、尊重しているということである。メンバーそれぞれが抱えるものは一人ひとり違っている。その違いを理解しつつともに活動しているのは、「これまで様々な困難を体験してきた同じ仲間」という連帯感があるからこそである。

4) 社会的役割を担う

地域で生活し働くということは、社会的役割を担うことでもある。そのことは、家族からの信頼を得ると同時に、「A」で働くメンバーの自信へとつながっている。「自分で働き、なんとか食べていっている。人間、成せば成りますよ」とメンバーは語る。また、発病によって親戚付き合いが無くなったメンバーは「親戚付き合いがなくなったことはちょっと悲しいっていうか。まあ、今はもう、実家を離れて地域に住んでいるので、で、まあ、ちゃんと仕事もしてるらしいというのは(親戚も)わかっていると思うので。今はいいんですけど」と語る。実家から独立し仕事をするということは、そのメンバーのライフステージにおける課題としっかり向き合っていることとも読み取れる。そして、そのことが、家族とのつながりやメンバーの自信、そして、これまでに損ってきたものを取り戻すきっかけとなっているのである。

5) 家庭を築くことによる責任と希望の醸成

「A」では3組のカップルがメンバー同士で結婚し家庭を築いていた。初めてウエディングドレスを着て婚約指輪を贈られ、みんなから祝福されたメンバーは「初めてだったからうれしかった」と幸せいっぱい笑顔で語った。そして、結婚しパートナーとともに暮らすなかで、それぞれのメンバーは家族を守るという責任とこれからの希望を抱いていた。ある夫婦は生活費のやりくりを二人で考え、現在では貯金も少しずつできて笑顔を見せた。そして、両家の家族との付き合いやそれぞれの両親の世話など、当たり前の生活、家族との関わりを取り戻しており、老後は二人の時間を大切にしてくつくりと生きていきたいと語った。また、ある夫婦は子どもを出産し生き甲斐を得るとともに、これから経済的な面で子どもを育てていけるのかという不安を抱いていた。そのため、仕事において現状からステップアップするための方策を考えていた。

結婚し家庭を築くということは、人として当たり前の営みであり、生きる喜びを得るとともに多くの困難と遭遇することにもなる。当事者は、この体験からパートナーに支えられているという実感や、相手を思いやることの素晴らしさを体感し、そして、生きる力を培うのであ

る。

6) 地域住民との自然な関わり

当事者が地域で生活することにより、地域住民との付き合いは自然に生まれてくる。日常的に交わされる挨拶から始まり、町内会の班長を務めたり集落の草取りに参加するなど、住民とともに活動する機会が多い。また、メンバーが普通に回覧板をまわしたり、ゴミの分別をする姿を見て、地域住民は精神障害者の〇〇さんではなく、隣に住む〇〇さんへと意識を変化させるのである。先行研究でも示されているように、地域住民との接触体験は当事者理解を大きく深めるのである（焼山他：2003；竹島：1997；深谷：2004）。

また、あるメンバーは近隣住民への信頼について語った。24歳で発病し、その後近所の人々からの差別を体験した。しかしそのメンバーは、「発病までの24年間の付き合いがある。だから、何かあったら近所の人たちのために協力する」と語っていた。その言葉通りに、ご近所から家電製品の修理を依頼された時など、普通に近所付き合いを行っていた。

7) 将来を見据える力

「A」で活動するメンバーは、現在だけではなく「A」の未来についても見据えていた。経営状態を気にしながら、手作り作品の販売や喫茶だけでは時代の波に乗っていけないと考え、地域住民が必要とする仕事を模索していた。そして、もっと地域の方に足を運んでいただけるように宣伝方法を考えたり、「とにかく地域と一体になって、（仕事が）できたらいいなあ」「積極的に商工会の活動に参加して何かやりたい」と希望を語った。また、他のメンバーは、「これからはわからないから楽しみなんですよね。わかってたらおもしろくないですもんね」と未来に対する挑戦とも言える頼もしいコメントを聞かせてくれた。

(2) 主体的活動から生じるもの

1) 自信と責任感の構築

「A」では7年間、町が委託したゴミ分別収集を請け負っていた。そのことについてメンバーは「7年間、無事故できました。ちゃんとみんなゴミの分別にも関心を持つようになったし、今も病院や「A」のちり捨ての仕事につながっていますからね」と語った。そこには仕事に対する責任と、やり遂げたという自信が感じられた。また「A」の活動についても、「国からの補助金は一切ないので、収入、支出を考えながら仕事をしている」と

か、「みんなで試行錯誤のなかここまでできた」と胸を張って語るメンバーの姿があった。

「A」では、地域における一店舗という位置づけのもと、地域と対等な関係でビジネスを展開している。地域にある他の店舗と同様に収支を追求し、大型店舗の進出で商店街が抱える問題を「A」も一緒に抱えているのである。

2) 支え合う喜びの実感（人の幸せを願う気持ち）

二人のメンバーが結婚し一緒に暮らしたいと希望した時、病院でカンファレンスが開かれた。医療スタッフが両家の家族に話をし、二人の関係を理解してもらった。また、地域に住む場所を探すときも、本人とともにスタッフが大家に挨拶し、理解と了解を得たのであった。その大家は二人のために台風に備え、借家の補強を行った。

他の場面では、あるメンバーの妊娠をきっかけにメンバー同士で話し合いを行い、これまでたばこの煙で充満していた一部屋を禁煙とした。健康な赤ちゃんを産んでほしいというメンバー全員の願いからである。それからは、メンバーの喫煙スペースは屋外となった。

「A」の活動を行うにあたり、メンバーが苦手とする値札つけや計算、台帳の記入などは、ボランティアが協力している。また病院からも応援部隊が協力し、経理を手伝っている。喫茶部門が忙しい時は、医師が手伝い場をつなぐ。

このように「A」の活動を通して、メンバーやその周囲にいる人々がお互いに助け合い、支え合っている。人に支えられることの実感から得る人への信頼を、他の場面では自分が周りの人を支えるという喜び、達成感に置き換える。そして、人とつながることの重要性を体験を通して理解するのである。

(3) 新たな自己の発見（特別な存在からの脱却）

1) 他者から受容されることによる安心感

人間関係が怖いと語っていた当事者が、「A」のメンバーから「働いてもいいよ」と言われ、安心して働く姿が見られた。また、仲間と一緒に楽しく働くことで、自分の存在を肯定的に受け止めることができるメンバーもいた。「私がいると場が楽しくなるって言われて、とてもうれしい」と活動の楽しさを語っていた。人に受容される体験は安心感を生み、生活のなかで生じる不安の軽減につながっていく。

2) 自分を語ることが癒し

メンバーには、講演会などで自分について語ることが

癒しであるという者もいる。「ダイレクトに自分たちの言った言葉に対して返事が返ってくるから、話すことでいい状態を保てるし、メッセージも伝えられる」と語り、他のメンバーは「別に当たり前前に仕事もしているし、当たり前前に地域で生活してるから、別にそれはおかしくないことだから、そういうところでお話するのもいい機会じゃないかなと思って」と語る。そして、自分について語り、多くの人の理解を得ることがメンバーの自信や癒しにつながっていた。

3) 回復の可能性を信じる

「A」で活動していた地域住民が店を開店することになり、メンバーの一人も現在そこで働いている。住民がそのメンバーの人柄や仕事に対する姿勢を知り、一緒に働きたいと思ったのがきっかけである。そのメンバーは店で働くようになり、「指示を待ってばかりではいけない。自分から何ができるかを考え行動しなければならぬ」と新たな発見や学びを得ていた。また、他のメンバーは「この病気を持ちながら働くことができるのかなど不安であったが、実際に働くことにより、この不安をクリアできた」と語った。

「A」のメンバーは活動を始める前に、他の地域で活躍している当事者の話を聞き衝撃を受けていた。「地域で働き一億円稼いでいる」や、「病気になってよかった」と語る当事者の声に驚きを隠せなかった。しかしこの時の衝撃が、「自分たちにも何かできるのではないか」という希望につながったのである。このことから、当事者が地域で働くという事実が、全国各地で生活している当事者の希望や回復に大きな影響を与えることがわかる。その人がおかれた環境のなかで、どう人は変化し成長するのか。周囲の人はもちろん、当事者自身が自分に備わっている計り知れない可能性を信じることから回復は始まるのかもしれない。

4) 未来の自分を想像する

将来、両親が亡くなったとき自分たちはどう生きていくのかをメンバーは考えていた。結婚しパートナーとともに暮らすなかで、親なき後の生活設計を想像したり、同居している母親がいなくなったら、親戚や近所の人たちとの付き合いがなくなっていくだろうと語るメンバーもいた。そのために、今から集落の活動に積極的に参加し、関係性の構築に取り組んでいた。また、障害者自立支援法の施行にあたり、「障害者に優しい時代は終わって、後はもう自分たちの生活をちゃんと考えなさいと。だから、そこを踏まえながら自分たちがどう生きていく

かです」と、これからの生活に対する思いを聞かせてくれた。

(4) 偏見や障壁とともに生きる

1) 自分の中にある偏見への気づき

「同じ病気の自分たちでも、同じ病気の人をやっぴり差別しちゃうんですよ。人間ってというのはやっぱりそういう動物だから、仕方ないんですけど」とメンバーが語った。また、初めて入院した時に自分自身も精神障害に対する偏見があり、怖くてたまらなかったという話も聞かれた。偏見や差別が特別なものではなく、どの人の心にも存在するものであるということをメンバーは体験のなかから学んでいた。そして、他のメンバーとともに活動し、喜びや困難をともに体験することで、自己の中にある偏見が知らぬ間になくなっていることをメンバーは無意識のうちに体験している。地域の人たちが偏見のまなざしを向けることが特別ではなく、自分たちのなかにも存在するものであるという発見が、地域住民との距離を縮める第一歩となる。

2) 他者から理解されることへの希望

「A」で働くメンバーは、「精神障害者の抱える苦しみは、実際に障害者にならないとわからない」と語りつつ、地域住民に自分たちとの触れ合いから、精神障害への理解を深めてほしいと願っている。発病により友達や親戚が離れていき、冠婚葬祭には呼ばれなくなる。このことがメンバーの心の痛みとして残っている。また、若い医療従事者には、様々な人生における困難を体験し、自分たちの歩んできた道を想像してほしいと言う。

「A」では、小学生が飲み水をもらいに来たり駄菓子を買ったりと、子ども達との触れ合いも多い。子ども達は、メンバーを「精神障害者」としてではなく、「親切なおじさん、おばさん」という枠組みで理解している。メンバーは、子ども達との触れ合いに癒され、元気をもらおうという。また、「気をつけて帰りなさいね」という優しい声かけで、子ども達との関係性はより豊かなものとなる。このようにメンバーは、様々な人との関わりのなかで人から理解されることの喜びを体験するとともに、多くの人に理解してほしいという希望を持つのである。

考察

本研究の目的は、地域で生活し働く精神障害者に対してインタビュー調査を行い、就労や地域生活が当事者の

回復に及ぼす要因を明らかにすることであった。そして、そのインタビュー調査から15の概念を生成し、その概念を4つのカテゴリーの①地域生活への挑戦（困難を乗り越えることで獲得する力）②主体的活動から生じるもの③新たな自己の発見（特別な存在からの脱却）④偏見や障壁とともに生きるに集約した。当事者が地域で生活することにより、自然と住民とのつながりが生まれ、信頼関係が構築される。そして、そのなかでメンバーは人とつながる喜びを実感するとともに、人が生活のなかで当たり前体験する「困難」を取り戻すのである。向谷地（2006：28）は、「統合失調症を抱える当事者の苦しみは、病気を背負ったこと以上に、本来の自分らしい苦勞を奪われていることだ」と述べる。地域生活のなかで当事者が遭遇する「困難」は、社会で生活するための力を生み出す原動力となる。「困難」をなくすのではなく、その「困難」をいかに乗り越えるかを支援することが援助者の役割である。

「A」の活動により当事者が地域で働いたり家族を築くこと、すなわち社会的役割を担うことが自尊心や責任感の回復につながっていた。また、メンバーは仲間とのつながりから、自身の病気に対する理解を深め、症状や障害との上手な付き合い方を体得していた。焼山ら（2003：7-18）の調査では、社会参加を阻む問題として「患者の病状の重さ、不安定さ」が本人、家族、スタッフ3者の共通認識であるとされ、このことから症状コントロールが当事者の社会参加にとって重要な課題であることがわかる。自己の疾病や障害と上手に付き合いしていくには、適切な医療とともに、仲間との関わりから自己をよく理解することが求められる。

当事者自身が実際に地域で生活することで、日々の生活に必要なサポートの内容を具体的に把握することができる。そしてメンバーは、その「必要なサポート」について自分の言葉で表現するのである。精神障害者の地域生活支援において何が必要なのか、また、何が必要でないのかは、生活者である当事者自身が一番解るのかもしれない。地域で暮らす当事者が、必要とする支援について声を挙げることで医療、福祉との連携はより充実したものとなる。

メンバーは地域における様々な体験から、これまで自分が背負ってきた「特別な存在」を解消し、「普通の地域住民」へと少しずつ意識を変化させていた。そして、人々が普通に未来への希望を抱くように、「A」で働くメンバーも未来について希望を語った。この未来への希望は当事者が、自らの人生を取り戻した結果とも考えられる。他者によって決められた人生ではなく、自己決定

できる人生であるからこそ、未来を考えることができるのである。そして、当事者が地域で生活し働きながら、未来への希望を持ち続けるために求められるものは、仲間や援助者とともに少しずつ住民の障壁に働きかけていく根気と、住民への信頼である。その長い時間をかけた関わりは、当事者だけではなく、地域住民および援助者の変化にもつながっていくのである。

おわりに

我が国における障害者福祉は、国際障害者年（1981年）を機に、ノーマライゼーションの理念に基づく「在宅施策の充実」と「社会参加の促進」にその比重を置くこととなった。また近年では、社会的排除（ソーシャル・エクスクルージョン）の対象となる人々を、つながりの再構築を図りながら社会に包摂していくこと（ソーシャル・インクルージョン）が、新しい社会福祉のあり方と考えられている（日本ソーシャルインクルージョン推進会議2007：13）。障害の理解においても、国際生活機能分類（ICF）では病気や障害を単に個人レベルのこととせず、個人の活動や社会参加を環境との関連性のなかで捉えるよう改訂された（長崎他2006：3-11）。このように、人が地域社会に包摂されること、そして人と環境との関連性は、これからの障害者福祉の核として捉えられている。そして、人々と環境との相互作用がどのように発展し、豊かな社会へとつながっていくのかが、これからの障害者福祉を左右しているといっても過言ではない。また長谷川（2001）は、地域福祉計画福祉部会において、福祉文化の問題としてプロセスの重視を挙げ、プロセスに関わることによる福祉価値の共有化や福祉意識の醸成を指摘している。援助者は、人と環境に働きかけ、その相互作用におけるプロセスのなかで、人や環境がエンパワーメントされるシステムをどのように構築していくのかを考えなければならない。今回のインタビュー調査において、当事者が地域のなかで自分らしく生きることの素晴らしさを当事者の生の声として聞くことができた。「生まれてきてよかった」と全ての人が実感できる地域社会の構築が、今後援助者に求められる最大の課題であると考えられる。

「A」の活動を通して、メンバーは回復の道を辿っていた。しかし、「A」の規模拡大や、ネットワークの複雑化など、今後の取り組みによっては、その機能や当事者に与える影響が変化する可能性もある。精神障害者の就労のあり方やその可能性をより明確に示すために、「A」の活動に対して今後も時系列で調査する必要があ

る。そして、多様な就労形態を検討し、障害者が就労を通して社会参加できるシステムづくりを追及することが、精神障害者支援におけるこれからの課題であるとする。

謝辞

本研究を行うにあたり、快く調査にご協力いただいた「A」メンバーの皆様をはじめ、ご家族、地域住民の皆様、スタッフの皆様に深謝申し上げます。

註

- 1) 有限会社萌・有限会社ひと間／監督 四宮鉄夫 (2001) ビデオ「まちと暮らす第1巻すったもんだの郷」より
- 2) 作成したワークシート（抜粋）を巻末に資料として添付する。

引用文献

- 1) 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂。
- 2) 厚生労働省 (2001) 「第三回福祉部会議事録」援護局総務課。
- 3) 竹島正・寺峰いつ子・須藤恵子ほか (1997) 「精神保健領域におけるノーマライゼーション推進の視点について」『精神保健研究』43,67-74。
- 4) 長崎和則・辻井誠人・金子努 (2006) 『事例でわかる！精神障害者支援実践ガイド』日総研。

- 5) 日本ソーシャルインクルージョン推進会議編 (2007) 『ソーシャル・インクルージョン格差社会の処方箋』中央法規。
- 6) 早野禎二 (2005) 「精神障害者における就労の意義と就労支援の課題」『東海学園大学研究紀要』10,29-43。
- 7) 深谷裕 (2004) 「精神障害者に対する社会的スティグマの除去：三つのアプローチ：教育・接触・制度政策」『精神障害とりハビリテーション』8(2),173-179。
- 8) 向谷地生良 (2005) 「当事者の力とインクルージョン—浦河べてるの家での取り組みから—」『ソーシャルワーク研究』30(4),254-261。
- 9) 向谷地生良・浦河べてるの家 (2006) 『安心して絶望できる人生』生活人新書。
- 10) 焼山和憲・伊藤直子・石井美紀代ほか (2003) 「精神障害者に対する地域住民の社会的距離に関する研究：地域ケアを阻む要因分析」『西南女学院大学紀要』7,7-18。

参考文献

- 1) 児玉祐一 (2004) 「『安心共同体』へ向けて—患者が経営する有限会社“萌”の試み」『精神医療』35,10-18。
- 2) 田中英樹 (2005) 『精神障害者の地域生活支援 統合的生活モデルとコミュニティソーシャルワーク』中央法規。

概念名	環境づくり（人とつながる環境、専門家の力を借りる）
定義	精神障害者が働きながら地域生活を継続させるために、人とつながる環境づくりが重要であるということ。地域生活を送る当事者が必要とするものは、気軽に相談できる相談施設の設置である。重要なのは、専門家の適切な関わりを求める声を当事者自身が挙げること。
ヴァリエーション	<ol style="list-style-type: none"> ① 有志の会は本当に一般の商工会に入っている人たちとか、一般の商店主の人たちが「A」をどんなふうにしていこうかという、そっちの方が「A」のコンセプトを作った方なんですよ。 ② 有限会社だから色々な方に出資してもらって、出資者を募りました。出資者には、会の資料とかをお送りしてますけど、「A」の収支報告とかも。 ③ 最初から地域の方々のお知恵とか、そういうのを拝借した方が、すごくやがてはいい応援団的に助けてくださいますよね。いろいろまあ、雨漏りしたとか、イベントがある時なんか助けてくださったりです。 ④ 自分たちが地域の行事に参加できるのも、有志の会の方たちがいらっしゃったから。参加しやすかった。参加しやすい環境になってきたんじゃないでしょうか。 ⑤ ゴミの分別の資源ごみをリサイクルセンターまで配達していたわけですから。だから地域のなかでもこう、いろいろコミュニケーションが生まれてきたわけですよ。 ⑥ ここはほんと、ミーティングっていうか、問題があったら話し合いますからね。だから、そういう話し合いのなかで色々な問題解決に向けて、問題を解決しなくてもいいから、その問題についてとことん話し合いますから、そこがいいんじゃないでしょうか。みんなでワイワイガヤガヤ話し合っ、なんかいつの間にかすっきりしたなって、それがいいんじゃないかなって。それが仲間ですからね。 ⑦ 「A」の活動で）今までそんな交わりのなかった人達がメンバーになって、こう仲良くこう、たまにはケンカもありますけど、絆が生まれたんじゃないかなって。それはいいですよね。だから、まあ人といっぱい出会えたっていうことが楽しいですよ。 ⑧ ここができてから、お水を夏場、お水をもらいに来られるんですよ。子ども達が。こっちはまあ、子ども達の顔を見たら和むし、気をつけて帰ってねって一言添えたりとか。 ⑨ できればなんだろう。理想なんですけど、コンビニみたいな病院があればいいなちゅう感じで、行ってすぐ診てもらえるみたいな感じ。（省略）入院する手前でまあ、早めに休ませるみたいな感じのスタイルがいい。 ⑩ 差別とか偏見とかがあって、どうなくするって、なくなりはせんだろうけど、どう接しているのかちゅうのが。周りの人と。相談センターみたいなやつがあればですね。ちょこっつと行って、ちょこっつと話ができるようなところがあればいいとは思いますがね。
理論的メモ	「専門家の知恵や力を借りる」という発想で、地域住民を活動に巻き込んでいる。そして、地域住民との関係性を大切に育てることで、その後の「A」の活動に住民が積極的に協力するという状況が見受けられた。「適切な医療が必要な時に受けられるシステム」が必要であるということを生業者である当事者が、医療従事者に提案している。ニーズを主張することが回復の第一歩である。

概念名	症状をコントロールする力
定義	仲間との語りや様々な失敗を繰り返すことで、自己の病気や症状を理解し、独自の症状をコントロールする力を身につけること。
ヴァリエーション	<ol style="list-style-type: none"> ① 今は落ち着いてきちゃって、もう自分の病状が把握できるようになったんですよ。昔だったら、周りの人がみてストップかけないといけない感じだったんですけど、今はなんか周りも把握できるし。 ② 夏場は特に早期覚醒とかなくなっちゃるんですよ。2時とか3時とか夜中に起きちゃって。（省略）2時とか1時間の時間は自分の自由時間なんですよ。本当の意味での。自由時間だから、ま、ビデオをゆっくり観てみたりしてるんですよ。昔だったら大騒ぎして「先生やれ薬やれ、眠剤かえて」とか大騒ぎするんですけど、慣れっこになったらもう、まあまあ、じゃあ2度寝、3度寝して仕事すればいいじゃないかとか、そういう感じで気持ちの転換もできてますから。 ③ 瞬間湯沸かし器になる頻度が多くなったら、もう仕事をスパッと休んで、もう自分でこう、温泉に行ったりして。お金がかからないレジャーとかで気分転換もできますから。 ④ ある人が言うには、自分の言葉が早口でしゃべるようになったら少し危険信号だと言って言われたから、それも自分では。 ⑤ 病気のことにに関してね。理解し始めてね。自分の病気にに関して。なんか、みんなと話をすることによって、元気が出てきたり、ああ病気がってこうなんだとか、そういうのが、みんなとコミュニケーションをとりながら話しているうちに、自分の病気がってというのがうすくなるんだな、こうすれば治るんだなってことで、だんだん回復っていうか、治ってきて再入院しなくなりましたね。薬のこともだんだんわかってきたしね。 ⑥ 背負いすぎるって言われたりとか。もう最近では疲れたら裏で寝たりとかもできるようになったし、好きな時に来て、しんどかったら帰ってもいいみたい。 ⑦ 入院するぐらいだったら休んだ方がいいって言って、一カ月自分で休みを作って。そしたら入院しなかった。 ⑧ 今は病状が出る前に、薬を飲んで、まあ抑えてるって言ったらおかしんですけど、ごまかしてるっつうか。それと疲れた時には休むんですかね。 ⑨ まあ、ちょこっつと薬のことで聞きたかったりとか、走って行って薬剤師さんに聞いたりとか、あとちょつとまあ相談事とかあると、病棟まであがって行って、いろいろまあ相談というか。 ⑩ もう個人的なことだけけど、もう、体調を崩さないように、あのペース配分をして、「A」で長く働けるように、で、それだけです。 ⑪ なんかないと眠れなくなる。まあ、なるべく疲れないようにするちゅうこと。よく寝ることかな。薬を飲み忘れないようにということだけは。薬を飲み始めてしばらくジーンとしてたら幻聴が聞こえなくなって。で、もうちょつとしたら、また病気になるんだなって気付いて。 ⑫ 看護婦さんにしろ、ソーシャルワーカーにしろ、すごくいい人ばかりなんです。で、仕事中でも辛くなったりする時があって、暇なときにちょっと悩みがあった時に病棟に上がって、相談したりとか。話に行ったりとかね。気晴らしに行ったりとかできるのも「A」だから。
理論的メモ	病状と上手に付き合うことが、地域生活継続の鍵となる。人とつながりや受診、薬の活用、休息、自分の病気を知るといったことが、そのポイントであるようだ。

概念名	支え合う喜びの実感（人の幸せを願う気持ち）
定義	自分が幸せであるように、多くの人が支えてくれることの実感。また、人の幸せを願い、人を支えることの喜びの体験。その体験を通して、社会のなかで多くの人と生活するためのすべてを学ぶこと。
ヴァリエーション	<ol style="list-style-type: none"> ① 病院のなかで二人を応援する会みたいな感じ、じゃなくて、二人をカンファレンスみたいな感じで、してくれたんですよ。二人が住むにあたって、ちょうどそこが軒、ここから 30 秒ぐらいのところなんです。で、車がなかったもんだからそこがいいがちって、その大家さんのとこに探しに行ってくれたんですよ。挨拶に行ってくれたんですよ。スタッフの方が。 ② 先生方も自分たちの家族を説得してくださって、なんとか OK をとってもらったりして、家についてはその大家さんが不動産屋さんを正式に通して、ちゃんと敷金礼金とか、ちゃんとしてくれるんだったら貸しますよだったんですよ。 ③ 台風が来るときは怖かったです。古い家だったから。偶然大家さんが作品出品者で、くうでんを作っている方なんです。いろいろ助けてくださりまして、家の外壁もちゃんとまた、張り替えてくださって。 ④ ○○さん（メンバー）が子どもさんが産まれるってことで、まあ妊娠したってことで、ここを禁煙スペースにするがちゅうことで、禁煙になったんです。 ⑤ ボランティアの方が台帳づけとか、あとは計算をしてくださったり、また、病院から応援部隊が来て、また、経理の部分をしてくださったり、色々してくださってるわけですよ。 ⑥（厨房が）忙しい時には、○○先生（医師）なんかが入ってくれたりして、場とつないでくれたみたいな感じですね。 ⑦ ちゃんとコミュニケーションがとれますもんね。ベテランのメンバーでほら、こんな風に時間を振り分けて、お店として運営してきてますもんね。普通だったらお盆にお店を開いてちゅうか、逆に言えば初盆とか、初盆のとこなんかみんな休ませて、そうじゃないところのメンバーは出てきてちゃんとやるわけだから。 ⑧ みんな条件は一緒だと思うんですよ。色々。まあ、病気の程度は色々あるけど、みんな一緒の、（省略）一緒のなんちゅうのかな、仲間っていうかな、そんな感じだから。みんな精一杯やってくれているんで、私も負けないようにがんばらなきゃって思いますよね。
理論的メモ	人に支えてもらう喜び、また、人を支えることの喜びを実感することで、人や自身への信頼を取り戻す。また、社会の中で「つながること」の重要性を体得することが、生きる喜びへとつながるのかもしれない。

概念名	自分を語る事が癒し
定義	自分を語り、その自分を第三者に受け入れてもらう（受容）という体験から自信や癒しを得ること。
ヴァリエーション	<ol style="list-style-type: none"> ① 「A」の歴史のこととか、自分の家族のこととか、病気のこととかそういうことをしゃべってくるのは別に、別にそう苦にはならなくて、逆に言えばストレス解消みたいな感じで、（話を）聞くことが自分たちの病気に対しての理解を深めてくださればなと思いますよね。 ②（自分のことを話すことについて）別に今だったら、あんまり気にはしてないんですけどね。まあ、こうやってなんとか食っていけてるわけだし。 ③（講演会について）ダイレクトに自分たちの言った言葉に対して返事が返ってきたもんだから、自分たちもこう話すことによって癒されるし、話すことも好きだから。 ④ いいなんかリラクゼーションちゅうか、自分たちで話すことによって、自分たちも逆にいい関係、いい状態を保つことができますし、また、メッセージも伝えられますし、また、返ってきますし、そういうことです。 ⑤ 別に当たり前前に仕事もしているし、当たり前前に地域で生活してるから、別にそれはおかしくないことだから、そういうところでお話するのもいい機会じゃないかなと思って。 ⑥ 私もおしゃべり好きなので、結構、戸感わずにできた。その時は自信、自信とか、まあ自分自身のです。そういう言葉を発することによって、より一層自分が大きくなれるっていうか、病気になんか負けないっていうか、そういうふうになってたんですけど。 ⑦ その場その場の雰囲気を読んで、今日はどういう人たちが聞きに来て、どんなお話した方がいいのかなとか、まあ自分たちで考えながらこう、しゃべるようにもだんだんなってきました。自分たちの発病からだいたい今までのほら、生き方とか、これからどうしていきたいとか、そういうのを書いていって、それをまあぶつけてみて、どんなふうに戻ってくるのかっていうのが楽しみです。 ⑧ メッセンジャーみたいな感じで、家族会とか、そういう講演会でもそういう感じで病気の体験とかも話できますし。
理論的メモ	自分を開示し、自分について他者に語り、そこで聞き手である他者に受け入れられる体験、認められる体験から、当事者は癒されるのである。また、直接的な対話が繰り返されることで、当事者のこれまでの世界は広がりを見せる。自分の病気やこれまでの人生を、他者に知られないように息をひそめて生活していた当事者にとって、精神障害という事実やこれまでの困難のすべてを理解してもらうという体験は、自己の解放につながる。

概念名	回復の可能性を信じる
定義	新たな体験から、自分の回復の可能性に気づくこと。また、他の障害者が回復の道をたどっている現状を知り、自分にもできるのではないかと自分に対する信頼を回復すること。
ヴァリエーション	<ol style="list-style-type: none"> ① 当事者活動団体の講演会で、一億円稼いでるとか、すごいカルチャーショックでした。聞いてみると、病気になってよかったって、ある人が言いましたので、自分たちは半信半疑だったんですよ。不思議な人たちがいるものになって。 ② 精神病を持った患者さんでもできることはできるんですけど、病気がじゃあ、あの精神病院も精神科も社会ですって答えただけね。確かに内科、外科と一緒に法律が違うだけで、同じ社会でしょう。で、社会で適応できないっていうけど、実際は社会に適応しつつ、それで社会にもまれて入院したわけだから、実際、社会に適応できるのよね。幻聴さえなければね。 ③ (ボランティアさんが) 地域で弁当屋さんを始めたので、そこに来てくれないかちゅうことで、そこに月から金まで行って。そこでは、それこそ主体的に自分から仕事を見つけてやっていかないと、ただボーッと待ってるだけじゃだめなんで、ってところもあるし。 ④ 地域っていうか、外で働いてよかったなって思うのが、まあその病気を持っていて働けるかなっていうのが不安だったけれども、まあそれができたっていう。クリアーできたなって思ってる。
理論的メモ	同じ障害を抱えて生きている人が、仕事をしてお金を稼いだり、病気を肯定的に受け止め前向きに生きていることを知り、自分達はどうかと振り返るきっかけをつかんでいた。成功している人の存在を知ると、自分たちも何かできるのではないかとモチベーションにつながる。また、様々なことにチャレンジすることで自分のなかにある可能性に気付いていく。
概念名	自分の中にある偏見への気づき
定義	差別や偏見は地域住民だけが抱くものではなく、当事者自身も持つものであるという気づき。当事者自身がそのことに気づくことで、住民への想いも変化する。そして、仲間との関わりや地域生活のなかで、無意識のうちに自己の中にある偏見が解消されていく。
ヴァリエーション	<ol style="list-style-type: none"> ① 同じ病気の自分たちでも、同じ病気の人をやっぱり差別しちゃうんですよ。それっていうのは人間っていうのはやっぱりそういう動物だから、仕方ないと言えば仕方ないんですけど。 ② お薬がきつかったりしたら、やっぱり動作も鈍くなってきたりとかして、ちょっとこう、会話もかみ合わなかったりして、ちょっと、うん。一年の間にたぶん自分が回復してきて、まあ、普通通りに働けるようになったら、できない人のことが気になっちゃって。 ③ 精神患者のひとの付き合いっていうのが今まで全くなかったから、いるんな人がいるし、病状が悪くなったりとか、仕事中に。なんかそういうのを目の当たりにして、ちょっとびっくりしたっていうか。
理論的メモ	自分のなかにある障壁に気づき、それをいかに取り除いていくのか。仲間との関わり、受け入れられる体験の積み重ねで自然と自分のなかにある壁が取り除かれるのかもしれない。それは、地域住民も同じである。

概念名	他者から理解されることへの希望
定義	本当の苦しみは当事者でないとして理解できないかもしれないけれど、自分たちのこれまでの人生に思いをはせて、少しでも理解してほしいと願うこと。他者に精神障害者としてではなく、その人として理解されることへの希望を抱くこと。
ヴァリエーション	<ol style="list-style-type: none"> ① まあ、病気になったら友達もいなくなるんですよ。いるんだけど離れていくんです。関わりたくない存在なんです。親戚も離れていくし。冠婚葬祭とかいったら、めでたいやつには、まず呼ばれなくなっていくし。 ② 町の人も抵抗なく、子ども達も入ってきて、ここで「お水ください」って言って色々ですが。 ③ 地域の人も教室なんかがあったら、もう顔なじみになって。たまにあの、買い物で会ったりすると、ちょっと挨拶をしたりとか、「A」の人ですよって。私は見覚えがなくても「A」の方ですよって言われたりしたこともあって、ああ覚えてくれたんだなって。 ④ 子ども達も水飲みに来たり、安全な店で、気軽に入れて、駄菓子も置いてあって。 ⑤ 全国的にはなかなか有名になれないんですけども、まあ、地方でも、県内でも、まあ「A」で何人かのやんちゃ坊ががんばってるぞおみたいなの、わかってほしいなって。うん。 ⑥ 今年からソフトクリームを始めて、ちょこちょこってこう、地域の方が、本当に少しなんですけど、来てくれるようになって。それであの、精神病っていうか、そういうのもこう、偏見が少しでも和らげばなって。私たちを見て。やっぱり、怖いっていうイメージがあると思うんですよ。マスクミが色々取り上げたりしてですよ。あるから、ちょっとでも和らいでくれたらなあと思いますよね。 ⑦ やっぱり私たちの年からすれば、やっぱり若い、若い医療関係の人は、やっぱり、もうちょっとあの、修行をつんでほしいなって、いろんな苦勞をして、あの、私たちの気持ちももうちょっとわかってほしいなって思ったりすることもありますよね。 ⑧ 本当はこういう病気ですって言って、そしたらむしろ周りにこういう人がいたっちゃうことを知って、安心して仕事に没頭されてましたね。 ⑨ 特にあの、差別とか偏見とかいうものは、たぶんわからんやろな。実際体験しないど。
理論的メモ	関わりを多く持って、精神障害を理解してほしいと当事者は願っている。また、人生経験を重ねて、人の苦しみや悲しさに共感できる援助者になってほしいと願っている。